

【研究ノート】

蕪村書簡 山玄沖・井高典宛 一春興帖『夜半楽』の出版をめぐる一資料

俳諧師・画家の与謝蕪村(1716-1783)は、友人や知人に小まめに手紙を書き送った人です。さいわい、三百数十通もの蕪村の手紙が伝存しており、それを読みますと、蕪村の人柄や生き方や暮らしぶりが浮かんで来て、ますますその人が身近に感じられます。彼の手紙には、俳諧や画とは違った魅力があります。その温か味のある気取りのない独特な書風は、文人の「書」としても優れています。

ここで紹介する山玄沖・井高典宛の蕪村の手紙(図1、紙本墨書、15.9×52.8cm)は、かつて鈴木重雅氏によって初めて翻刻され(「蕪村の手紙」『ひろむ』第11巻1号)、のち集英社刊『古典俳文学大系12・蕪村集』(大谷篤蔵ほか校注、昭和47年)に再録(原書簡、未見)、そして岩波文庫『蕪村書簡集』(大谷篤蔵、藤田真一校注、平成4年、11年)に原書簡によって補訂され、掲載されました。しかし、残念なことに、この手紙には日付がなく、二人の宛名のうちの一人「井高典」について不明とされてきましたので、今まで、この資料は、蕪村研究に十分に活かされることはありませんでした。

最近、わたしはこの手紙の実物を見る機会があり、宛名の二人と

蕪村との関係に興味をもちました。調べてみますと、いくつか面白いことがわかりました。すなわち、この手紙が安永6年(1777)の「春興帖」(『夜半楽』)に関係する手紙であること、また行間から、前年の暮に嫁がせた一人娘「くの」への父親としての思い遣りをうかがい知る興味深い資料であることがわかりました。

(本書簡の釈文)

益御安寧被成御座、奉恭慶候。爾ば愚老春興帖相催候。依之左之題にて御発句御立案被下、御加入奉希候。

梅 鶯 柳
春雨 臘月 蛙
霞 肌

其外春季、何にても。

右題之内にて、一二句御立案被下度候。是非々々急々奉願候。

一、御自句御出来無御座候はば、愚老御代作社加入候間、左様思召可被下候。其詮いかにと申候に、いづれも御名家之御事に候故、御名を出し候て、夜半社中の面目に備申度候。いやでもおふでも、御加入之御覚悟可被下候。

尚押眉御物がたり。

〈表書き〉

山玄沖様
井高典様

謝無郵

この手紙は、山玄沖と井高典の二人に対して、蕪村が宗匠を勤める俳諧結社、夜半亭の「春興帖」(当年の新春初会の作を中心に春季の句を集めて出版した冊子、正月に出版する)に発句を一、二句、立案して加入してもらえないかと書き送った依頼状であります。発句の題は、「春興」にちなむ梅、鶯、柳、春雨、臘月、蛙、霞、肌(そのほか春季であれば何でも)で、その中から一、二を選んで出句していただけないかという。「急々」とあるところから、正月中の出版に間に合わせるために、その出来をかなり急いでいることがわかります。日付を書いていないのも、時間がないことを暗に示しているようです。丁寧な言葉遣いから、宛名の人物は、蕪村にとって何か特別な人のように思われます。「是非是非」とありますから、彼ら二人は、社中の人ではないようです。

蕪村は発句を依頼した理由について、次のように述べています。「もし、あなたさまの発句が完成できなかった場合は、わたし(蕪村)があなた方のお名前前で代作いたしますので、その旨ご了承下さい。そのわけは、お二人とも京のご名家でありますので、お名前が春興帖にありますと、わたしども夜半亭社中に対する世間の評価が上がります。いやといわずに是非とも、覚悟をもって、ご加入くだ

さいますようお願い申し上げます。なお、お目にかかった折、お話いたします」。

この依頼状は、いささか厚かましく脅迫めいています。なぜ、蕪村はこのような手紙を書いたのでしょうか。

宛名の一人「山玄沖」とは、京都の医者、山脇玄沖(宝暦7年(1757)生、号東海、字之豹。)のこと、名医を排出した山脇家の人です。彼の祖父は「腑分け(解剖)」で有名な山脇東洋(宝暦12年(1762)没、57歳)であり、父は東門(天明2年(1782)没、51歳)で同じく医者、俳号「雨遠」といい、蕪村の親しい遊び仲間でありました。そういう関係で、蕪村は雨遠の長子、玄沖と知り合ったようです。しばしば蕪村は雨遠、玄沖に手紙を書いておりますが、それらの多くは頂き物のお礼や俳諧についての内容であります。山脇親子に宛てた手紙としては、安永7年(1778)12月27日付のものがあります(岩波文庫『蕪村書簡』99番)。その時、玄沖は二十三歳でした。また、玄沖の母は、大富豪、京角倉家第11代玄篤の娘であり、彼の弟、玄信は嵯峨角倉家第14代玄龜の養子(のち第15代になる)になっています(『寛政諸家譜』)。すなわち、玄沖の山脇家は、角倉家ともつながりをもち、名家中の名家でありました。蕪村の心には、そのような名家の山脇玄沖が夜半亭の後援者になってもらえればありがたい、という思惑があったのではないのでしょうか。

ところで、いままで不明とされ

図1 蕪村書簡 山玄沖・井高典宛 紙本墨書 15.9×52.8cm

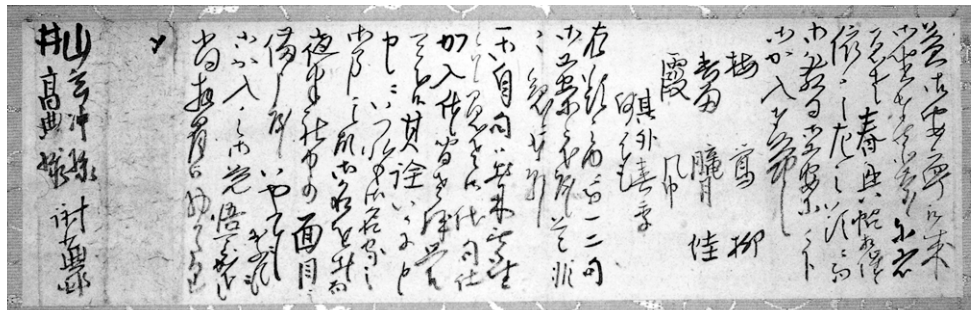
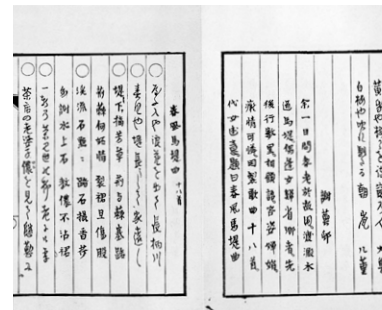


図2 春興帖『夜半楽』のうち「春風馬堤曲」の冒頭部(版下は蕪村自筆) 林衛文庫蔵



てきました「井高典」とは、じつは、呉服・両替商として知られた豪商三井家十一家のうちのひとつ、総領家の「北家」につぐ本家筋の「新町家」の第4代高典(たかつね、延享3年—文化8年(1746—1811))のことです。三井文庫の史料によりますと、高典は、小石川家第3代高長の長男であり、宝暦12年(1762)に新町家へ入家し、同年12月に高弥の娘と結婚して、のちに家督を嗣ぎました。故あって(彼は商いには不向きな性格の持ち主だったのかもしれませんが)、彼は安永4年(1775)4月、三十歳の若さで「長者町」に別居隠居しました。翌安永5(1776)年6月27日に剃髪し、実名の高典(たかつね)を「コウテン」と音読みして通称としました。退隠後、専ら文雅の道に励み、なかでも茶の湯を嗜み、しばしば自ら亭主となって茶会を催しております。当時、風流人として聞こえました。天明2年(1782)9月に、長者町から衣棚榎木町上ル町の新宅に移り、晩年をおくりました。

さて、蕪村書簡から、玄沖と高典とは親しい間柄であったことがうかがわれます。三井家の「新町」や高典が隠居した「長者町」は、山脇家があった「東堀川中立元南」(文政五年版『平安人物志』)からさほど遠い処ではありません。確かな資料はありませんが、山脇親子は、新町三井家のホーム・ドクターをしていたのではないかと推察されます。

ここで、蕪村が俳諧友達の雨遠ではなく、息子の玄沖に発句を依頼したことが注目されます。おそらく、彼の本当の目的は、玄沖を紹介者、あるいは仲介者として三井家の高典との親交をはかり、後援者になってほしかったからではないかと思われます。

この手紙がいつ出されたかについては、宛名が「井高典」(セイコウテン)とあるところから、彼が安永5年6月27日に剃髪し、名を高典(コウテン)と改めた、それ以降のことと考えられます。また、この蕪村の手紙の書風は、安永5、6年のそれと共通します。

そうしますと、手紙の中にある「春興帖」とは、安永6年の「春興帖」に違いありません。なお、蕪村はそれ以降、「春興帖」を出版しておりません。

安永6年に、62歳の蕪村が編集し出版した「春興帖」一冊は、現在、伊丹の柿衛文庫と天理図書館にそれぞれ所蔵されています。半紙本の紙数10丁の小冊子、縦22.4cm、横15.8cm。こげ茶色地に小菊丸文様が施された表紙には、柿衛文庫本、天理図書館本ともに題簽がありません。愛弟子の寺村百池の家(京都)に伝わった本書原本(伝存しているかどうかは未確認)には、蕪村の自筆になる「夜半楽」の題簽があったことがわかっています(穎原退蔵博士の大正14年のノート。尾形弴『蕪村の世界』岩波書店、平成5年)。それで、こんにち、この「春興帖」は『夜半楽』の名で呼ばれています。

内容は、初めに目録を掲げているように「安永丁酉春の初会歌仙一卷」、「春興雑題四十三首」、「春風馬堤曲十八首」、「澗河歌三首」、「老鸛児一首」から構成されています。奥附の「安永丁酉春正月 門人宰鳥校 平安書肆 橘仙堂板」にいたるまですべて版下は蕪村の自筆になるものです。字体や割付けに統一感があり、蕪村渾身の自信の小冊です。歌仙の前書に「祇園會乃はやしもの云々」とあり、「蕪村の発句「巖巨をしたり顔なる俳諧師」から歌仙は始まります。次に「春興」にちなむ春季の発句が夜半亭社中四十三人によって詠まれています。そして「謝蕪村」(図2)が詠む「春風馬堤曲十八首」「澗河歌三首」「老鸛児(一首)」の「俳詩」三連作でおわる。遠い昔の自分「宰鳥」(蕪村の若き時の俳号)も「校合者」として陰で参加しています。この『夜半楽』は「歌仙」「発句」「俳詩」によって、あたかも「ミュージカル」の舞台ように構成されています。このミュージカル『夜半楽』の最大の見せ場は「春風馬堤曲」の場面であり、「澗河歌」はその反復の小場面です。「堤を歩み」そして「河を下り」、老いた主役「老鸛児」

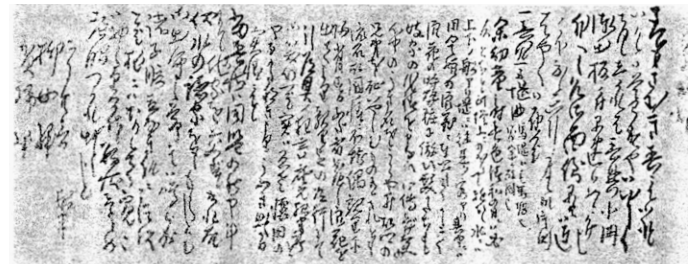


図3 蕪村書簡 柳女・賀瑞宛 安永6年2月23日付

の歌「春もや、あなうぐひすよむかし声」で静かに幕が下ります。このミュージカル『夜半楽』には、三人の蕪村、すなわち俳諧師「蕪村」、詩人「謝蕪村」、黒子役の若き「宰鳥」を登場させています。それぞれ現在、未来、過去の場面を担当させています。新しい詩体の「俳詩」に賭ける老詩人「謝蕪村」の気迫には圧倒されます。本書簡の中国風の名「謝蕪村」も、そのことと関係があります。

さて、「春興雑題四十三首」には、山玄沖と井高典の発句はありません。蕪村の期待に反して、二人の出句はありませんでした。知友の玄沖はともかく、俳諧の人と思われる高典が夜半亭社中の「春興帖」への出句を遠慮したのは、茶人として当然のこともありましょう。蕪村は彼らの発句の代作を行っておりません。蕪村の当初の自論見は外れました。

『夜半楽』の上梓は大幅に遅れ、二月の下旬になってやっと出来上がりました。安永6年2月23日付の伏見の柳女・賀瑞親子宛の手紙(図3)には「春興小冊斬出版二付、早速御めにかかけ申候」とあり、早速、門人たちに届けられたようです。その出版が遅れた理由は、蕪村が正月中旬から月末まで「余寒に申り」(霞夫宛書簡、安永6年1月晦日付)床に伏っていたためと思われるのですが、本当は、玄沖と高典の発句の到来を今か今かと待っていたためではないでしょうか。しかし、発句を入手できなかった。前の柳女・賀瑞親子宛の手紙には「当春帖は同盟の社中計にて、他家を交へず候」とあり、結果として

そのようになりましたが、かえって、他家を交えなかったことが幸いして、すっきりした「春帖」に仕上がりました。

口碑によりますと、安永5年12月の暮れに最愛の一人娘「くの」を三井の料理人で、西洞院榎木町下ルに住む柿屋伝兵衛に嫁入りさせています(百池日記抜書では「柿屋市兵衛」とあり)。父は、それを「良縁」といい喜びました(延年宛書簡、安永5年12月24日付)。柿屋伝兵衛の住所は新町三井家に近い処です。「三井の料理人」とは、新町三井家の料理人をさしているのではないのでしょうか。そうしますと、柿屋伝兵衛の主人である三井高典の後見があれば、きっと娘が幸せな結婚生活をおくる事が出来ると思うのは、父親としては自然な感情です。「井高典」宛の蕪村書簡の行間には、父親としての娘への愛情が感じ取れます。しかし、不幸にして結婚生活はうまくいかず、安永6年5月に娘を婚家から取り戻すことになりました(正名宛書簡、安永6年5月24日付)。晩年の手紙と思われる春道宛書簡の中で「長者町の大福長者も風流及がたく」といい、長者町の風流人として知られた「井高典」を揶揄しており、蕪村のその無念さはその後も消えることはなかったようです。

さて、蕪村没後に編まれた追善集『から檜葉 上下』(九葉編、天明4年(1784)刊)の中に、「山脇氏秋樹」による「この夕春尽んとすおもひ哉」の句があります。この「山脇氏秋樹」とは、山脇玄沖その人ではないのでしょうか。

(林進)

季刊 美のたより No.135

平成13年7月6日

発行 大和文華館